

日本語の閉鎖音に対する韓国人のフォーリズム

崔 光 祐

日語日文学科

(1983. 4. 30 接受)

〈日文要約〉

無声閉鎖音 [p, t, k] は世界言語に共通に表れる普遍的子音で、すべての閉鎖音の基本になる。またこれらは有声と自気と硬声で互いに相関関係を成しているのが特徴である。この相関関係において韓国語と日本語は系統的に違いを見せており、このために日本語の閉鎖音を出す時、韓国語の影響によるフォーリズムが生じる。ここでは両言語の音声現象と音素体系を通じてその解決を図った。

日本語의 閉鎖音에 대한 韓国人의 포리니즘

崔 光 祐

日語日文学科

(1983. 4. 30 接受)

〈國文要約〉

無声閉鎖音 [p, t, k] 는 世界言語에 共通으로 나타나는 普遍的子音으로, 모든 閉鎖音의 기본이 된다. 또 이들은 有声과 自氣와 硬聲으로 서로 相関關係를 이루고 있는 것이 특징이다. 이 상관계에 있어서 韓國語와 日本語는 音素的으로 차이를 보이고, 이로 인하여 日本語의 閉鎖音을 낼 때 韓國語의 영향에 의한 포리니즘이 생긴다. 여기서는 兩言語의 音声現象와 音素體系를 통해서 그 해결을 꾀했다.

I. 序 言

これは、日本語の閉鎖音の音体系と発音をより正確にするために韓国語と日本語(必要によっては英語も)の関連部分を対照したものである。

一つの言語と他の言語の音体系の対照分析は、純粹な言語学的記述を図ることよりも、究極的には教室での外国語教育という実用的目的のために必要であらう。対照(あるいは比較)こそは、事物の本質を知るための最も容易な研究法であり、そして対照語学の最も大きな任務は、第一に母国語と対照させることによって外国語をよりいっそう理解させる点にある。

外国語教育の際に於いて言語形成期(大体満三才から満十二・四才位まで)を過ぎた学習者の場合、次の

ような傾向がある。

1. 自分で発音できない音は、自分で発音できる似た音に引き寄せて聞いてしまう。
2. いくら原音通りに発音しようと努めても、発音器官の習慣的運動が妨げとなって、既習の音に似たようにしか発音できない。
3. 自分で発音し分けられず、聞き分けられない音は、文字までも書き分けられない。

それで外国語教師に必要な基礎知識としては、その外国語の発音に関する知識は勿論、学習者の母国語に関する知識及びそれに基づく問題点の予測能力などが必要である。母国語は学習者の中に定着し全く自由に驅使し得る発音の体系であり、外国語を学習する場合、母国語の発音体系から新しい学習言語の音を見つけようとすることは必然的である。母国語

と学習言語の音とを対応させて類似した音を見つけ出す。その場合それは類似した音であって、全く同じ音でないということがはっきり認識されていればよいのである。つまり発音体系が異なった場合、類似した音であってもその環境によって異なる面を持つ。したがって、母国語の中で探された音は母国語から抜け出て、やがては、もうひとつの発音体系の中に組み入れられるべきものなのである。母国語からの脱出がうまく行われないと、学習言語の音はいつまでも母国語の音の中に止まることになる。

われらが外国語を聞く時、母国語の偏見で聞きがちになることが多い。ここで注意すべきことは、言語そのものに価値を与えて外国語に対して優越感を持つとか、あるいは劣等感を持つとかいうものではないということである。⁽¹⁾ 人間であればだれでも他の言語を自分の偏見を持って聞くという事実がわかればわれらは自らすべての言語が本質的に全く同じように人間生活のための手段であるのに気づくようになり、外国語を学ぶ時しばしば感じる劣等感とかその他の心理的葛藤を除くことができるであろう。

II. 本 論

韓・日語の両言語には、調音位置と調音法によって生じる数多くの音声があるが、ここではその中で閉鎖音(破裂音とも言う)を対照の対象にした。それは、韓・日語の両言語において閉鎖音の音体系がかなり違っており、実際そこから生じる問題が少なくないからである。

閉鎖音はその調音される位置を、(a)唇音部(Labial)、(b)歯音部(Dental)、(c)喉頭部(Guttural)の三つに分けることができるが、これらは下顎に付着している積極的調音器官からすれば、(a)唇、(b)舌先、(c)舌背が接する部分である。そして具体的にこれらの位置で調音される閉鎖音はそれぞれ [p] [t] [k] に相当する。唇、舌先、舌背は口腔を閉鎖するのに最も適切に運動する器官で、(a)両唇を重ねること、(b)舌全体が伸びた形で舌先が口腔の前よりの位置に触れる、(c)舌全体が丸まった形で、舌の背

が口腔の後よりの位置に接するという、それぞれ特色のある活動によって、容易に識別される音声を発することができる。このため、この二つの位置による調音は世界中の言語に共通のものであって、この内いすれかを欠いているものは極めて希だとされている。

日本語の閉鎖音を韓国語のそれと対照するのは、韓国語話者が使う日本語の問題発音を予見し、それを記述するためである。したがって対照の順序は日本語の音を基準として、韓国語と必要によっては英語のそれと対照していく。

対照分析の過程は次のようである。① 音体系の分析、日本語と韓国語の閉鎖音の音素を個別的にその体系を分析する。② 音体系の対照 (a) 両言語は音声上同一か、類似した音素を持っているか。(b) 音素の発音は類似しているか。(c) 音素の分布は類似しているかなどを明かす。③ 問題音の記述、問題になる音(音素及び異音)を抜き出して記述する。

I. 日本語の閉鎖音

日本語において閉鎖音は無声として /p, t, k/, 有声として /b, d, g/ がある。各音の表われる環境と異音は次の通りである。

/p/ → [p] / # ___ 語頭([paN⁽²⁾] [pattʃiŋ])
 /V ___ V⁽³⁾ 語中([opela] [ippai])
 /b/ → [b] / # ___ 語頭([baka] [bookN])
 [B] / V ___ V 語中([oβoetʃu] [iβatʃaki])

日本語の /b/ は閉鎖が弱い。語頭以外の位置では特に弱い。バ行の子音は、語頭では確かに閉鎖音であるが、語頭以外では両唇有声摩擦音 [β] である場合がある。例えば、「ばれる」の「ば」は [ba] であるが「あばれる」の「ば」は「Ba」である

/t/ → [t] / # ___ 語頭([takoN] [tehoN])
 V ___ V 語中([itaβa] [otemba])

日本語の /t/ は母音 /i/ /u/ の前では破裂音 [tʃ] [tʃu] になる

/d/ → [d] / # ___ 語頭([dombuŋ] [daiβuŋ])
 V ___ V 語中([udoN] [hadeŋ])
 /K/ → [K] / # ___ 語頭([kaβaŋ] [kimeŋ])

(1) 日本人は韓国語が有声無声で語の意味を分化しない点をあげて韓国語を卑しめる傾向があるそうである。森元瑞、言語学新論、p. 18 翰信文化社、1980。

(2) 語木の /ŋ/ と母音・半母音そして [s] 子音の前の /ŋ/ は正確には鼻母音である。天沼寧外、日本語音韻学 p. 54. くらしお出版 1981。

(3) 日本語は開音節であるため語中は全て V-V(Vは母音)という環境で表わすことができる。

V___V語中([ikɪtu] [okosu])
 /g/→[g]/#___語頭([gambat'u] [gooku])
 V___V語中([kagami] [igi])
 [ŋ]/V___V語中([kaŋami] [iŋi])
 語中での [ŋ] 音は [g] 音と自由異音の関係で、どちらに発音するかは議論が多いがここでは言及しない。

[ʃ]/V___V語中([gaʃami] [iʃi])
 [ʃ] は [g] を無理に引き伸ばして発音した場合に出て来る音である。グ [gu] の [u] を引き伸ばすなら簡単であるが [g] を引き伸ばそうとするのである。もっとも実際に使う場合には意識的に努力して発せられるのではなく、閉鎖する力の不足から来る、たるんだ感じの音である。若い人の中には [g] の代わりに口音の摩擦音 [ʃ] を用いる人があるそうである。(4)

2. 韓国語の閉鎖音

韓国語の閉鎖音は、無声の /p, t, k/, 有気の /pʰ, tʰ, kʰ/, 硬首の /p', t', k'/がある。

/p/→[p]/#___語頭([pul] [puja])

[p] は語頭に表われるのが原則で、語中の無声子音の後にも使われるが、二の場合は、大体硬音になるのが普遍のようである。硬首かどうかはよく区別されない。(5) 以下 /t/ /k/ も同じである。

[b]/V___V 有声音間([nambi] [kambu])

[B]/間隙 3度(6) 以上の音の間で [b] と任意に変異される。([kalBi]~[kalbi] [maβu]~[mabu])

[pʷ]/___#音節終声で未破音([papʷ])

[čəŋgapʷ])

/pʰ/→[pʰ]/#___語頭([phal] [phalda])

___語中([aphida] [apʰe])
 /p'/→[pʰ]/#___語頭([p'alda] [p'ul])
 ___語中([kop'ɪ] [pap'ɪ])
 /t/→[t]/#___語頭([tal] [to:k'i])
 [d]/V___V有声音間([sadari] [kada])
 [tʷ]/___#音節終声([tatʷt'a] [titʷt'a])
 /t'/→[tʰ]/#___語頭([tʰal] [tʰada])
 ___語中([itt'a] [pet'araqi])
 /tʰ/→[tʰ]/#___語頭([tʰal] [tʰada])
 ___語中([itʰal] [pakʷtʰal])
 /k/→[k]/#___語頭([kada] [kom])
 [q]/V___V有声音間([paqaji] [səŋgakʷ])
 [ʃ]/間隙 3度以上の有声音の間で上の [g] と任意に変異される。([igan]~[iʃan] [ilgi]~[ilʃi])
 [kʷ]/___#音節終声で未破音([pakʷ] [pakʷč'a])
 /k'/→[kʰ]/#___語頭([k'ada] [k'ač'i])
 ___語中([tʰok'i] [ək'æ])
 /kʰ/→[kʰ]/#___語頭([kʰal] [kʰidarɪ])
 ___語中([čök'a] [pakʰa])

3. 英語の閉鎖音

英語の閉鎖音は、無声の /p, t, k/ と有声の /b, d, g/ がある。前者は語頭では有気音になって [pʰ, tʰ, kʰ] に発音され子音 [s] の後では無気音になる。そして後に閉鎖音が続く場合は未破音 [pʷ, tʷ, kʷ] になり、語末では部分的に未破音になる。後者は語頭では部分的に無声化する。

4. 対 照

以上の三つの言語の閉鎖音を対照して表を作って共通の音と欠かれた音を調べてみると次のようない

両唇音			歯 莖 音			喉 頭 音		
韓国語	日本語	英語	韓国語	日本語	英語(7)	韓国語	日本語	英語
/p/ /pʰ/	/p/	/p/ /b/	/t/ /tʰ/	/t/	/t/ /d/	/k/ /kʰ/	/k/	/k/
/p'/	/b/	<pʷ>	/t'/	/d/	<tʷ>	/k'/	/g/	/d/
<pʷ>			<tʷ>		<tʰ>	<kʷ>	<ŋ>	<kʷ>
		<pʰ>	<d>			<g>		<kʰ>

< > は異音でしか存在しない音。

(4) 川上 肇, 日本語音声学概説 p.37. 東京桜楓社 1981.

(5) 許 肇, 國語音韻論, p.175. ソウル正音社 1979.

(6) 許 肇 (1979) pp.27~28. 参照

(7) 英語の /t/ と /d/ は韓国語と日本語の /t/ /d/ より後よりの音である。

くつかの事実がわかる。

(1) 韓国語にはあるが日本語にない閉鎖音：[p^h, p', p', t^h, t', t', k^h, k', k']

(2) 韓国語にはあるが英語にない閉鎖音：[p', t', k']

(3) 日本語にはあるが韓国語にない鼻閉閉鎖音：[ŋ]

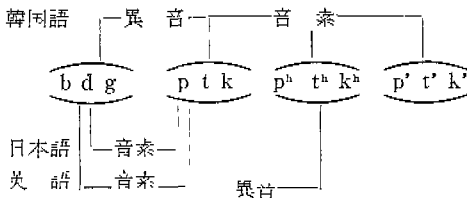
(4) 各語において独立音素でなく、異音にしか存在しない音：

① 日本語：[ŋ]

② 韓国語：[b, d, g, p', t', k']

③ 英語：[p^h, t^h, k^h, p', t', k']

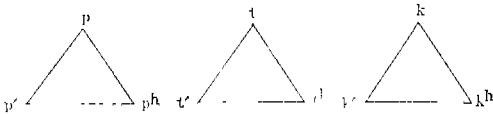
(5) 二つの言語の閉鎖音の音素体系に於いては下の図のように相当異なる面を示している。日本語と英語の p/b, t/d, k/g は音素的区別(phonemic difference)を成しているのに対して、韓国語の p/b, t/d, k/g は異音的区別(Allophonic difference)に過ぎないし、p/p^h, t/t^h, k/k^h は韓国語では音素的であるが、英語においては異音的である。



(6) 日本語と英語はその大部分が有声/無声で相関(Correlation)をなしているが、韓国語は無声/有気/硬音で相関をなしている。

日本語と英語：p - b, t - d, k - g.

韓国語



(7) 以上の結果から、閉鎖音において韓国語が口・英語に比べて著しい現象は 有声という音声資質が言葉の意味を区別するのに非関与的である点である。しかし日本語と英語においてはそれが関与的であるから日本語とか英語を発音する時には特に注意すべき所である。

(8) 日本語で無声有聲の対立のある閉鎖音は [p, b], [t, d], [k, g] (または語中のŋ)で、日本語学の用語「清濁」とは異なる面がある。清濁観点から論ずれば「ハ行・バ行」の対立となり、音声学の有声・無声とはずれている。

5. 問題音の記述

閉鎖音の音韻的対立の組として代表的なものは、有声音：無声音⁽⁸⁾、有気音：無気音、硬音：軟音である。このように、個々の音素は互いに関連しあい、孤立せず、全体として整然たる体系をなしている。

これらの調音関係を分析してみると、閉鎖音は、調音部の閉鎖(Contact)か破裂(Release)に伴う入りわたり(On-glide)か出わたり(Off-glide)によって認識され、持続部(Hold)ではなんの音も聞きとれないことがその特徴である。特に出わりの性質によって閉鎖音は分かれる。破裂後呼吸によって生じる継続的な噪音である気(Aspiration)の有無によって有気音と無気音にまた声帯振動である声の音無て有声音と無声音に分かれる。これらの閉鎖音は口腔での調音と喉頭調音との時間的關係でも違いがある。無声(無気)音では破裂と同時に後続する母音のための声帯の振動があるが、有聲(無気)音では持続部で前もって声帯が振動して破裂後すぐ完全な声を出す。つまり有聲音は持続部の調音と同時に声帯が振動するのである。これに対して有気(無声)音は口腔の調音と喉頭の調音との間に時間的差がある。すなわち破裂後すこして声帯が振動を始める。この間に気ははいる。硬音(あるいは濃音)は持続部で口腔内部の気圧及び調音機管(特に喉頭)の緊張度が高く強く破裂させる音である。

韓国語の閉鎖音には、/p, t, k/ /p', t', k'/, /p^h, t^h, k^h/の二系がある。/p, t, k/系列と /p', t', k'/ /p, t, k/系列の対立は喉頭緊張の有別の資質有無からなっている。/p^h, t^h, k^h/系列と /p, t, k/系列の対立は強い気の有別の資質からなっている。

以上の調音関係から見て、韓国の日本語学習者において主に問題になる閉鎖音について論ずることにする。問題点と言えはまず次のようなことを上げることができるだろう。

(1) 日本語の語頭初音の無声閉鎖音は韓国語の有気音と同じであるか。

(2) 日本語の語中の無声閉鎖音は韓国語の硬音と同じであるか。韓国の日本語の学習者の中には語頭初音の無声閉鎖音を韓国語の無声有気音と同じように、そして語中の無声閉鎖音を韓国語の硬音と同じように発音する傾向がある。実際に学習の場てそ

のように発音するよう教える教師も少なくないようである。

(1) 日本語の語頭初音の無声破裂音

川上肇氏は日本語に於いて言葉の最初に来る無声閉鎖音は、普通有気音であると言っている⁽⁹⁾。例えば、[コメ]は実は単なる[kome]ではなくて、詳しくは[k^home]である。そしてその[h]の長さだけ母音[o]の長さが短くなるのである。あるいは出だしの音は弱い気とあって[ʔ]というしるしを使ったりする。⁽¹⁰⁾一方、小泉保氏は日本語において気という音声質を認めていない。⁽¹¹⁾ 両氏の説は相反しているが、共に間違っているとは言えないというのは日本語において気という音声質は前で述べたように、意味の弁別に関与しないために、どちらに発音しても意味の伝達には問題ないという理由もあるであろう。許雄氏は韓国語の「ㄷ」はごく強い有気音[p^h]で、出だしの音「ㅁ」は弱い有気音[p^w]に発音されることがあると言っている。⁽¹²⁾ でも韓国語に於ては「ㅁ」を有気音とは言わないし、有気音の「ㄷ」とは区別している。つまり有気音という時の気の問題は気の有無の問題ではなく強いか弱いかの問題である。してみると、日本語の閉鎖音 /p, t, k/ は韓国語から見ると、弱い気であるから無気音であり、半音と言える韓国語の無声破裂音「ㅁ, ㅂ, ㅅ」と同じであると見てさしつかえないであろう。韓国人は気音と硬音を区別する耳が発達してはいるが、その区別が微々たる場合は区別がむずかしくなる。

日本語と同じく気は弁別力が無いといわれる英語の場合、出だし音の有声音 /b, d, g/ は普通部分的に無声化(Devoiced)する。⁽¹³⁾ この場合は気が弁別的働きをする。例えば、pie/buy, tie/die, kye/guy, で b, d, g が初音では無声化するために元来無声音である p, t, k とは気(Aspiration)で区別する。⁽¹⁴⁾ つまり英語の語頭初音の無声閉鎖音が強い気を帯びるのは、出だしの有声子音が無声化するため、意味の弁別に役立つためである。英語の初音がこのように

強い気を帯びるのは、気の弁別的である韓国語と同じである。気が全然弁別力のない日本語とはよい対照をなしている。

そして英語の音の連続体(Sequence)を見ると、[ps-] [ts-] [ks-] というものが見えない。これは強い気音には[s]子音が同時調音できないということを証明しているのではないであろうか。日本語 [tʃi] [tsu] は、昔 [ti] [tu] てあったため、⁽¹⁵⁾ もし [t] が強い気音であつたら [ti] [tu] が [tʃi] [tsu] になれなく、[tʃi] [tsu] も強い気 of [tʃ^hi] [ts^hu] にならなければならなかつたであろう。⁽¹⁶⁾

(2) 日本語の語中の無声破裂音の音価

梅田博之氏は日本語の語中の清音は気音が無いために韓国語の学習者には濃音として捕えている人が多いが、もしこれを濃音で、発音するつまる音と区別できなくなると言っている。⁽¹⁷⁾ 例えばサカ(坂)を濃音で発音するとサッカ(作家)と区別が付きにくくなる。どうして韓国人が日本語の語中の閉鎖音(無声)を濃音で発音するつまる音(促音)になりやすいか。それは韓国語の硬音の調音法と関係がある。

日本語のつまる音は、後の音の調音位置と同じ口構えて一拍の長さほど充分伸ばしてから破裂させる。つまり、つまる音に於いては一拍分の長さを持つことが大切である。

韓国語の [p^h] [t^h] [k^h] 音の長さをみると、これらの喉頭緊張閉鎖音の調音の際には、口腔閉鎖及び昇腔への通路(Velic)閉鎖が相当硬くなるからその閉鎖の期間も長くなる。この閉鎖の期間が長くなると言うことは、これらの閉鎖音の長さが長くなると言う意味である。許雄氏はこれらの閉鎖音が有声音の間では先の声をはやく切ってしまうてこれらの持続がかなり長くなって重複子音ないし長子音へ近い感じを与えることがあると言っている。すなわち /kop'i / (手綱)の /ko/ 音節はほぼ閉音節に近い感じを与えるとのことである。⁽¹⁸⁾ 崔鉉培氏も硬音はそれを形づくるには力が他の音よりももっと要し、声帯は緊

(9) 川上肇(1981) p. 72.

(10) 天沼肇, 日本語音声学, p. 60, くろしお出版 1981.

(11) 小泉保 音韻の構造, p. 48, 大修館書店 1981.

(12) 許雄 (1958) p. 28.

(13) 朴英奇, 新英語音韻学, p. 67, 学文社 1982.

(14) Peter Ladefoged, A course in phonetics 43 New York Harcourt Brace Jovanovich Inc., 1975.

(15) 中川祝大, 音韻史, 文学史 p. 190, 大修館書店 東京 1980.

佐伯梅友, 国語史要 p. 32, 武蔵野書院 1978.

(16) いまも山梨県南巨摩郡西山村余田では「ツ」「ソ」が [tu] [du] に発音されている, 探垣安日英比較語学入門 p. 32, 大修館 1980.

(17) 梅田博之 日本語教育 40 號 p. 36, 日本語教育学会 1980.

張り、口腔と鼻腔の閉鎖も硬くてその閉鎖の持続中は長くなる。それで、それを「長い子音」と言ったことがある。⁽¹⁹⁾ この閉鎖の持続が日本語に於ては一拍の長さにまで聞えられやすいのである。⁽²⁰⁾ これで日本語の語中の閉鎖音は韓国の硬音と同じ音価でないことが分かる。日本語の閉鎖音 [p] [t] [k] は柔らかく閉鎖(韓国語ほど硬くないという意味)して急に、すぐ離れる音であるから、語頭の無声閉鎖をくり返して練習し母音の後でも同じ音が出るようにする方法がよいであろう。

III. 結 論

韓・日・英語はともに同じ音, [p] [b] (兩唇音), [t] [d] (齒莖音), [k] [g] (軟口蓋音) を持っているか、実際にはそれぞれ異なる面がある。日本語と英語では大体同じ体系をなしているが、韓国語では平音の他に硬音 [p']、有気音 [p] があり、それぞれ異なった音素をなしており、[p] の異音ではない。[p] の異音は [b] である。このことは [b] [t] [k] の場合にも同様である。それで韓国人は有気音と無気音の対立を日本の無声音と有声音の対立と結びつけて、例えば [kʰa] は (カ) に [ka] は (カ) に符合させるという誤りをおかす場合が多い。[ka] と [kʰa] とをそれぞれ別の音節として意識しているから [ka] と [ga] よりも [kʰa] と [ka] の対立をはっきり意識するのであろう。そして多くの韓国の学習者にとって語頭の有聲 [b, d, g] はむしろ [p, t, k] と聞こえ、また自分でもそう発音しがちである。逆に語中では [p, t, k] が [b, d, g] になりやすい。その原因は韓国語には無気・有気の対立があり、それと日本語の有声・無声の区別がからみあい、語頭では有気の無声音に、語中では無気の有聲音に聞えることに

なる。

しかし、日本語の出だしの子音 [p, t, k] は気が弁別的な働きをする韓国語・英語(単語の初音で)とは別に、

(1) 強い気を伴う有気音ではなく、ごく弱い気を持った無気音に発音される。これは韓国語の出だしの子音 [p, t, k] と大体同じ音である。

(2) 日本語の語中の [p, t, k] は、韓国語の硬音よりも喉頭の緊張がずっと弱く、閉鎖から破裂がすぐ行われる。

音の柔らかさという概念からみても、硬音とか有気音よりも軟音である [p, t, k] が柔らかいし、また軟音よりも有聲音が柔らかい。それで気とか喉頭の緊張が弁別的でない日本語に於て無声の閉鎖音が強いて有気音とか硬音に発音される理由がないと見えよう。

参 考 文 献

- 川上泰, 日本語音声概説, 桜楓社, 1981.
 柴田武, 言語の構造, 大修館書店, 1981.
 天沼寧外, 日本語音声学, くろしお出版, 1981.
 小泉保, 英語学大系音韻論 I, 大修館書店 1971.
 樫垣実, 日英比較語学入門, 大修館, 1980.
 橋矢好弘, 英語音声学, こびあん書房, 1976.
 許雄, 国語音韻論, 正音社, 1979.
 崔鉉培, ウリマルホン, 正音社, 1978.
 朴英寿, 新英語音韻学, 学文社, 1982
 文洋秀外, 現代言語学, 翰信文化社, 1981
 Peter Ladefoged, A course in phonetics, Harcourt, N.Y. 1975.
 James E. Hoard, Introduction to Phonology, Prentice-Hall, 1978.

(18) 許雄(1979) p.175, 177, 181.

(19) 崔鉉培, ウリマルホン p.75. 正音社 1978.

(20) 韓国語の硬音 [p'] [t'] [k'] は [pp] [tt] [kk] にも表記される点に注意。